
緑の眼

春陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緑の眼

【Nコード】

N7997K

【作者名】

春陽

【あらすじ】

高級住宅街の一角にたたずむお城のような幼稚園。そこで僕は、緑色の眼をしたアンナちゃんと出会った。男勝りで、気が強くて、そしてとても綺麗な女の子。どこか不思議なところがあるアンナちゃんとの思い出と小さな恋のはじまり。

お城の中で・・・

緑の眼

高級住宅街の一角にある某有名建築家が設計したその幼稚園は、真っ白なお城のような建物と全面芝生の運動場に屋内プールまであった。いわゆるセレブの為の幼稚園だ。

僕は3歳になると専属の家庭教師がつき、一流といわれる英才教育を受けさせられていた。楽しかったといえばうそになるが、その教育のおかげか僕は記憶力と自我が発達することがとても早かったように思う。幼稚園に入園し、他の子と遊んでいるとひどく幼稚に感じたりすることがときどきあった。だけど、生真面目でつまらない家庭教師というよりはずっとましだった。だから、僕は幼稚園児らしい仕草や行動を他の子から学び、演じて過ごしていた。

『ねえ、何・・・描いているの?』僕が彼女に初めて話しかけたのは、お絵かきの時間のことだった。参観日に飾る為の絵をみんな自由に描いていた。

教室はクレヨンのあの独特の匂いと、みんなで育てている水栽培のクロツカスの微かな匂いがした。有名なデザイナーが考案したという大きな歪な形の机をぐるりと取り囲むように座って、みんな真剣な表情だった。僕は絵を描くことが嫌いで、ごそごそと落ち着きなく遊んでいた。先生に怒られ仕方なく画用紙に向かった。長い時間考えた末、黒のクレヨンで点々を連打し、『アリのたいぐん!』を僕なりに一生懸命描いた。なかなかのアイデアだと自分では思っていたのだけど、他の人の感性では理解してもらえなかったようだった。参観に来た母親が絵の前で泣いてしまったのでよく覚えている。母は普通をこよなく愛する人で、自分の子が他の子たちと少しでも違うということが不安で仕方ないようだった。みんなは、親の似顔

絵や、ペットの絵、自動車や遊園地などへたくそで楽しそうな絵ばかりが並んでいた。

そんな中、彼女の絵は（僕も人のことは言えないが）一言で言う和不気味だった。緑色の毛むくじやらかな何かを画用紙いっぱい描いていた。緑の毛に赤い眼がギロリとにらみ、裂けるような赤い口がにやりと笑っていた。隣で無心にクレヨンを動かす彼女の手から僕は目が離せなかった。緑色のモンスターかエイリアンかそれとも妖怪か？とにかく気になって仕方がなかった。

そして意を決して初めて彼女に話しかけたんだ。

『子犬だけど。』彼女は平然と答えた。『当たり前でしょ』と言わんばかりの怪訝そうな目で僕を見た。

『え・・・でも・・・そっか・・・』僕は何も言えなかった。普段の僕ならきつと大笑いして『それどう見てもエイリアンじゃないかー』とからかっていただろう。なぜかできなかった。それに、彼女に子犬といわれたら、ああ、子犬を描いていたのかと妙に納得したきもちになったんだ。

彼女の名前はアンナちゃんといった。おばあさんがイギリス人とかで彼女の眼は緑色だった。人形のような綺麗な顔の女の子だった。頭も良かったのだと思う。顔に似合わず気が物凄く強いので、クラスの子からは人気があったが女の子とは遊んでいるところを見たことが無かった。アンナちゃんのお母さんもまたモデルのように綺麗な人だった。傍に寄るといつもふわりと綺麗な香りがした。僕はいつもお洒落で凜とした雰囲気のアナちゃんのママが好きだったが、他の母親やほとんどの先生たちはアンナちゃんママがアンナちゃんをお迎えに来て誰も話しかけたりしなかった。遠巻きにひそひそと噂話をしているのだった。ボーイフレンドが5人もいるだとか、不倫をしているだとか、A V女優によく似ているだとか、妬みからくる根も葉もない噂だったように思う。僕の前でも大人たちは平気でそういう『大人の話』をした。聞いても分からないと思

い込んでいるようだったが、それは大きな間違いで大抵のことを僕は理解していたように思う。言葉の意味自体が分からないとしてもどろどろとした黒い空気はどんなに無邪気で無垢な子供にも伝わってしまうのではないかと思う。

アンナちゃんのママが実はお菓子づくりが上手で、植物や動物をとても愛している人だなんて誰も知らなかった。

ある日、幼稚園の門の前に子犬が捨てられていて、園の皆で世話をすることになった。

フィツと名づけられ愛嬌のあるその子犬はすぐにみんなのアイドルとなった。白いふわふわの毛並みに顔をうすぐめると太陽の匂いがあった。はじめやせ細ってガリガリだったフィツは、みんなの愛情の分だけこころごと太り、ぬいぐるみのようにかわいかった。フィツの評判はどんどん広がり、テレビの取材や写真集のモデルの話まで来ていたそうだ。

フィツの世話係が当番制でまわされることになった。餌やりと散歩と月に一度はシャンプーもすることになった。フィツの世話係の日には先生力作の犬のアプリケがついた腕章をつけてもらって、当番の子は少し自慢げで嬉しそうだった。

「おい、ケンタ、あの子が腕につけてるの何なの？」

しばらくの間おばあちゃんのお見舞いで、イギリスへ行っていたアンナちゃんが久しぶりに幼稚園に来たときのことだった。アンナちゃんはフィツのことを知らなかった。

「子犬のお当番のしるしだよ。アンナちゃんがいぎりしゅーに行ってるあいだにね、フィツがきたんだよ。」と僕が教えてあげると、アンナちゃんの顔色がさつと青ざめた。

「こいぬ・・・」と呟き、信じられないという顔で緑色の眼を見開いていた。一瞬、僕は何かも忘れてその透き通るような緑色の眼に見とれていた。それをこまかすように、

「あ、あんなちゃん、こいぬきらいなの？」と訊くと、

「あんな、きみの悪いやつらみたくもない！」と急にぷりぷりと怒り出してしまった。信じられなかった。あんなにかわいいものでも嫌いな人がいるなんて。

フィッツはとても人懐っこい犬で、誰彼かまわず飛びついてペロペロなめた。

フィッツに会いたくて、休みの日まで幼稚園に来る子までいるそうだ。僕も世話の当番がまわって来るのが待ちどろしかった。

ある朝、教室に入ろうとすると激しい言い争いの声が聞こえてきた。教室の中央でアンナちゃんと担任のみどり先生が今にも取っ組み合いになりそうな雰囲気だった。いつも教室を駆け回ってるクラスメートの子達はおとなしく二人の喧嘩に注目していた。

「フィッツの当番はみんなでするってきまったのよ！みんな順番に回ってくるの。アンナちゃんだけパスするなんてずるいでしょう。」先生は例の腕章をアンナちゃんに着けようとしたところ激しく抵抗されたようだった。右頬に引っかき傷ができていた。

本当は犬アレルギーや、犬が恐い子などは世話をしなくても良いと言っていたはずだった。そもそも当番制になったのはフィッツの散歩のときにリードの奪い合いになり、この幼稚園ではめつたに無いはずの喧嘩が頻発するようになったからだった。だから代わりにやりたい子はいくらでもいたはずだった。

みどり先生はアンナちゃんにだけ時々厳しくあたった。（その理由は僕がもう少し大きくなったときに分かった。）そして、何があってもアンナちゃんは泣いたりしなかった。それも先生には気にくわなかったのだろう。

「誰があんな化け物の世話なんかするか。お前らが勝手に決めたんだろうが。勝手にやってる。」口の悪いアンナちゃんはますます先生を怒らせてしまった。首まで真っ赤にした先生は、

「なんて口をきくの！いいから来なさい。」とアンナちゃんの細かい

手首をむんずと掴み、

力づくで犬小屋まで引つ張って行こうとした。アンナちゃんもさすがに力ではかなわないようだ。そして先生は扉のところどころと振り向き、「あきらくん、あなたも当番よ。一緒にきなさい。」と僕に向かって言い放ち、喚くアンナちゃんをそのままひっぱって出て行った。

……。あまりのことにしばらく放心していたが、みんなの注目が今度は僕に集まっていることに気づき、教室を出るしかなかった。なんでよりによってこんな日に楽しみにしていた当番が回ってくるのか。重い足取りで犬小屋に向かった。

職員室の脇を抜けた、エントランスの片隅に豪華な犬小屋があり、その周りを5メートル四方くらいの柵がぐるりと囲み、フィツがその中で自由に遊べるようになっていた。

ミニチュアのお城と天蓋つきのふわふわのベッドやその他日増しに増えるたくさんのおもちやや色とりどりのコスチュームなど。すべてフィツのファンからのプレゼントだった。

僕が着くとアンナちゃんはその柵の端にちよこんと座っていた。さっきまでとは打って変わって息もしていないのではないかというくらい静かに微動だにしていなかった。その様子はまるで存在を消そうとしているように見えた。フィツは先生にもらった餌を勢いよく食べているところで、先生はフィツの頭を撫でながら優しい眼でそれを見守っていた。

フィツが食べ終わると、先生はフィツを抱き上げ、こちらに向かって歩いてきた。

アンナちゃんの身体がビクツと緊張したのが伝わってきた。青い顔で眼を見開いて、どんどん近づいてくるフィツを見上げていた。先生の顔に一瞬だけ意地悪な笑みが浮かんだのを僕は見た。

「ほら、アンナちゃんフィツよ。かわいいでしょう。」と、さらにアンナちゃんに近づいたとき、アンナちゃんは僕のいる出口の方を振り向きダッと走り出した。その眼には涙が溜まっていた。先生は

わざとらしくフィッツを放した。無邪気にこちらに駆けてくるフィッツと蒼白になったアンナちゃんの顔と、それを無表情に見ている先生の顔を今でもはっきりと覚えている。僕はそのとき生まれてはじめて激しい嫌悪を感じた。いても立ってもいられなくなり、アンナちゃんとフィッツの間にさっと入り、勢いよく駆けてきたフィッツを抱き留めた。フィッツは嬉しそうにペロペロと僕の顔をなめた。ふわふわのフィッツからはシャンプーのいい匂いがした。本当にかわいい奴だと思つと同時に、なんでアンナちゃんはあんなに尋常じゃないほど恐がるのかとも不思議に思った。そして、

「先生は意地悪だ！」とフィッツを先生に押し付け、アンナちゃんを追いかけた。

校庭の隅にうずくまっていたアンナちゃんをみつけた。側に座つたはいいが、どうしてよいのかわからず、泣き止むまでアンナちゃんの頭を撫でてあげた。薄い栗色の長い髪からバラのような甘い香りがした。いつも男勝りで誰よりも気が強いアンナちゃんの初めて見る弱い、女の子らしい一面に僕は少しドキドキした。

校舎から、みんなのピアノの演奏に合わせて歌う声が聞こえていた。風に乗って届くその声はすごく遠くて、優しい日の光が心地よくて、ずっとこのままこうしていたかった。まるで二人だけの切り取られた時間のなかにいるような不思議な感覚だった。

しばらくして落ち着いたアンナちゃんは、照れ笑いを浮かべながら、

「あきら、・・・おまえいいやつだな。なあ、子犬って本当はかわいいのか？」と、澄ん緑色の瞳で真剣に見つめられ、僕は真っ赤になった。

「うん、かわいいと僕は思うよ。アンナちゃんは子犬、嫌いみたいだね。あの・・・ねえ、どうして・・・」そのとき、はつと思いで出した。あの緑色の化け物の絵を。アンナちゃんはあれを子犬と言っていたことを。だけど、僕はなんて言っただけか分からずただ緑色にキラキラ光るアンナちゃんの眼を見つめることしかできなかった。

アンナちゃんは、

「なんだか、よくわからないことがきつと世界にはいっぱいあるんだな。だけど、あきらのことはきつと、ずつと好きだ。」とニツと笑った。天使みたいな笑顔に僕はますます真つ赤になった。そして、アンナちゃんは少しためらってから、チュツと唇に唇を押し付けた。アンナちゃんの乾ききらない涙のしよっぱい味がした。まだキスの意味もよくわかっていない僕だったが、恥ずかしくなってその場から逃げ出してしまった。

次の日から、アンナちゃんは幼稚園に一度も来なかった。そして、みどり先生は僕と目を合わせてくれなくなり、春が来ると別の幼稚園に移っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7997k/>

緑の眼

2010年10月28日07時14分発行